

星 象 美 隨 感

Notes on Stellar Configurations.

野 尻 抱 影 *Hoei Noziri.*

山本一清様、『星座の美について』の御文、興深く拜讀いたしました。小生も先頃『天體の美感』と題する一文を或る隨筆集（未刊）に寄せ、中に星象乃至星座美に就いて言及しました。自然、お目に觸れることと思ひますが、ここには御文に惹かれて、星象の“十字形”に就き隨感を書かせて戴きます。

十字又は卍の起源は中々やかましい問題で、それには専門の研究書もあることでありますが、星象に關しては、智能の比較的進んだ民族の眼や、又は南十字星に見る如く、信仰を先入主とした眼であつて初めて十字形を發見するもので、素朴な、或ひは自然な見方は、先づ四つの星を菱形の輪廓に結ぶことであると思ひます。

この例で興味のあるのは、小生が最近マニラから入手したタガログ名の南十字星は *Crus na Bitwin*（十字の星）で、*Crus* の名の示す通り、明かに比島に多いカトリック教徒が西名を傳へたものであるに對し、純粹のマライ名は *Bintang Bobok*（[子供用の] 蚊帳の星、或ひは *Boboc* 釣床?）であることです。尤も、フィジ諸島ではこれを十字に結んで *Na Naga*（鴨）と呼び、 α , β Centauri を、それを追ふ二人の土人と見てをり、北十字の白鳥に對し、甚だ面白い見方です。但し、これには南十字星の如く、小ぶりの星の群れは、菱形に結ぶか、十字に結ぶかは紙一重ほどの心の動きの差と言へぬことはないかとも思ひます。マライ名でも、まだ原意の判明せぬ南十字星の名があり、後日判つてみれば、十字星だつたといふやうになるかも知れません。

白鳥座の大十字は、古代バビロニアの *Urakhga*（大鳥）、フォイニキヤの *Tsippur*（鳥）、アラトスによるギリシヤの *Ornis*（鳥）、ラテンの *Cygnus*（白鳥）、アラビヤの *Ae Dajajah*（牝鷄）いづれも十字に結んだ姿を大鳥の翔ける姿に見たものですが、これには南十字星などと違つて、中央に鮮かな γ を點じてをり、又 β にまで四等星の飛び石のあることが自然に長軸を引かせたものと考へられます。もし、この γ を欠いてゐたならば、他の諸星座に見る通り可成りの努力をやらぬ限り十字は發見し得なかつたに相違ありません。これに就いて小生がいつも興味を感じることは、支那で β を加へず、鳥の尾と翼に當る部分の星を結んで、銀河の天津と呼んだことで、これも一つの自然な見方でありませう。屢々耳にする、白鳥の形を直ちに七夕傳説の鵲に擬することが支那の星圖に迂遠な誤りであることは言ふまでもありません。百人一首の「鵲の

橋」を天の川とするのなどは、そぞろ冷汗ものです。但し、新たに白鳥に和名を命ずる場合、鵲を採用することは別問題ですが。

南方に赴く船上で、南十字星に對するあこがれから、さもない星々をいろいろに結んで十字を發見しようとする話は時々聞くことで、さうすれば曲りなりにも、あちこちに十字星が出来ることでせう。しかし前述のやうに、輪廓により星象を描き出すのが古代一般の民族心理であつたので、十字として傳へられるものは三四に留まつてゐるのだと思ひます。もちろん、今人の眼で、それらの間に清新な或ひは、より雄大な十字美を發見することは意味のあることです。ところで、これに就き秋澤君にもお答へしたのですが、北天で北十字に次ぐ優秀な十字の形は、Maunder が唱へてゐる馭者座のラテン十字、即ち θ , α (Capella) を横軸、 β , ϵ を長軸とするもので、從つて牡牛 β を含まぬものであります。しかし、支那の謂ゆる五車の五邊形が、東西共に自然な見方となつてゐることは言ふまでもありません。

終りに、御文にカンオベヤ以外に見出せる W の星象を擧げておいでになりましたが、Maunder はペルセウスの α , β (Algol) と、アンドロメダ γ , 三角 β , 及びアンドロメダ β を結んで大きな W を描いてゐます。これは直ぐその北に本物の W があるので、名案に相違ありません。しかし、これとても“Pegasus の大方形”にアンドロメダの一行の星を柄に結んで、巨大な北斗の姿と見る方が傑作であると思ひます。又、初めには容易に言ひ表はしにくいペルセウスの形を、貴著『星座の話』に、三つのカーヴを以て説明されてゐることは成程と感心しましたが、Maunder は同じく判りにくいヘルクレースの形を β から三つに岐れるカーヴで教へて、これを“百合の花”と呼んでゐました。しかし、日本ではやはり、あの中心部を杵か鼓の形に見るのが判り易いと思ひます。御説の通り、現在の星座の形は神話に禍ひされて、眼を無理強ひするものが多く、特に日本人向きでない龐大な區域に擴がつてをりますが、我が農村漁村に傳はる星象の見方や名には、自から平和な國土と生活とを反映して推稱すべきものが多く、他日、南天のややこしい星座を整理するやうな場合にも、大に参考となるものと考へてをります。

なほ小生は機を得て、“一つ星”——北極星（和名、北の一つ星）、南魚 α 、海蛇 α （アラビヤ名 Alphard、孤獨のもの）、Spica（同、Simak、同上）等や、“二つ星”——双子 α , β （和名、二つ星）、小熊 β , γ （同上）、蝸 ν , λ 、小犬 α , β 等や、“三つ星”——オリオン三星、蝸三星、鶯三星等や、その他三角形、四邊形など、類似の幾何圖形の星象を更に廣く漁りまして、東西の見方、呼稱、傳説等を比べて見たいと思つてをります。その節は又御示教を希ひます。不